

## 書 評

窪 德 忠 著

## 庚申信仰の研究

——日中宗教文化交渉史——

秋 月 観 暎

庚申の日の晩に寄合を催して神仏を祀り、飲食を共にしながら夜を更かす庚申待と呼ばれる宗教的な習俗が今日なお日本の各地に行われている。この庚申信仰はかつて我が国に行われた種々の民間信仰の中で最も普遍的な地域的展布と階級的普及を示したばかりでなく、幾多の特異な習俗を伴っていたため昔から世人の注目を集め、特にその思想的な起源をめぐって様々な所説を生み出してきた。古くは平安時代において既に「玄之聖祖老子之微言」に基くものとも信ぜられ、江戸時代には「道家の所説」に基くもの所説が広く信ぜらる一方「神武以来の伝統的な祭式」とする神道家の主張も行われた。また近年に至つては柳田国男氏によつて庚申待を日本固有の信仰習俗と見なす新しい見解が提出されたが、これに対して著者は専門の分野である道教研究の立場から反対を表明、昭和卅一年「庚申信仰」を著して「日本の庚申信仰のみなものと一つが中国の

道教でとく三戸の信仰」であることを主張したのであるが、その後この主張に加えられた日本民俗研究者たちの激しい批判に対して「日本の庚申信仰の現状をできるだけ広範囲にわたつて調査する一方、文献や遺物によつてその歴史の変遷を辿る。そうして、この両者を照合して、庚申信仰の多くの要素の新古を弁別したのちに、それらの諸要素と中国の三戸説およびその信仰とを比較する」ことによつて答うべく、北海道を除く全都府県五百六十余ヶ所にわたる实地踏査資料と平安朝以来の庚申関係資料は勿論、その他の史書・随筆・日記類・神仙修験各派の経論・典籍から和歌・川柳・芝居脚本などに至る日本の文献、並びに約千部、五千五百巻にのぼる道藏を主とする中国文献の精査・渉猟によつてえた龐大な関係資料を駆使して、さきの結論を更に確実な論拠によつて再確認したものが本書である。

本書の文字通り博引傍証に至らざるなき内容をその論証過程を辿りながら紹介を試みるには紙幅の余裕が乏しいので、ごく簡単に目次を追つて一瞥を加えておくならば、

## 序章 庚申信仰の研究法について

(二—三八頁)

## 第一章 三戸説とその信仰

(三九—一〇四頁)

この章は著者が庚申待の「みなもと」と主張する道教の

三戸説の内容、及びこの説が中国において三世紀ころ方士たちによつて創唱されて以来、長生を目的とする養生法として発展する一方、近世に及んで仏教信仰と結附いて宗教化されてゆく過程を明らかにしている。

## 第二章 庚申信仰の実例

(一〇五—一五六頁)

こゝで著者は全国を股にかけた採訪資料の中から山村・平地農村・漁村・中小都会・大都会における代表的な実例をあげて「現行庚申信仰は極端に厳密に言えば隣りの字隣りの組でさえも違っているけれどもごく大雑把にみれば大体同一」であることを明らかにする。

## 第三章 庚申信仰の現状

(一五七—四七二頁)

前章の結論を更に明確にするため全国の調査結果を庚申講の組織・勤行と祭祀・徹夜の習俗と伝承・庚申神の属性と利益・修験道と庚申信仰など十一項目をたてゝ数別し、現行庚申待の実態を手際よく整理・紹介している。

## 第四章 庚申縁起とその成立

(四七三—五三〇頁)

この章は著者苦心の発掘・蒐集にかゝる「老子守庚申求長生経」及び庚申縁起類の成立と内容を論じ、前者を介して三戸説と日本の守庚申の習俗、後者を介して守庚申の習俗と江戸時代後今日に至る庚申信仰との間の密接な思想的

な関係を剔抉している。

## 第五章 日本における庚申信仰の変遷(五三一—六七〇頁)

本章は著者の調査による日本の庚申信仰の文献資料を駆使して、守庚申発生の時期と見定める平安初期即ち八世紀後半以来江戸時代末期に及ぶ庚申信仰の変遷を刻明に跡付け、その発展過程を明らかにしている。

## 第六章 庚申信仰と三戸信仰

(六七一—七四〇頁)

この章がいわば本書の結論をなす部分であつて、以上の五章において展開された多方面に亘る考察を基礎として、日本の庚申信仰が過去における幾多の形式的な変遷にも拘らず常にその根底において道教の三戸説や三戸信仰との密接な繋りを有していることを立証して前記の結論を再確認している。

更に巻末には附章として「庚申塔と塚」に関する論考、附録として二百頁を超える詳細な庚申年譜、三十三点にのぼる庚申縁起集及び三戸表・文献資料目録、その他索引・調査地名一覧表が附加されている。

さて本書を一読して躊躇なく云えることはこの書物は単なる一時的な思い着きや机上の小細工でなく、著者の卓抜

な構想力と不屈な精神力によつて進められた丹念な文獻・实地調査に基く尨大な資料を踏まえて完成された文字通り血のにじむ労作であり、その内容も単に庚申信仰に止まらず広く道教学を中心として宗教学・文化人類学・民俗学等にまたがる新しい研究分野の開拓に成功した極めて優れた研究であると言ふことである。併しこの様に本書は獨創性に満ちた意欲的な研究であるだけに止むを得ないことゝはいえ、その行論の過程には幾つかの疑訝を懷かしめる点のあることも否定出来ないものがある。

まづ全般を通して強く感じられる第一の点は、本書が庚申信仰の変遷の跡を迎ることに優れた成果を挙げながら、その変遷を生み出す社会的な背景に対する歴史的な考察において聊か不備なるものゝあることである。例えば中世宮廷貴族の信仰に関して「室町時代の人々は、戦乱によつて惹起された社会不安の真唯中におかれて、ひたすら身の安全を祈るために守庚申を行つた。むしろ行わざるをえなかつたのである」(五七二)と云うが、庚申縁起の流布する室町末期以前、守庚申求長生経によつて行われた守庚申の目的が三尸の除去による辟病長寿の追求以外にあつたとは見られないので、守庚申の流行を直接社会不安に結びつけ

る解釈に著しく説得力を欠いている。また著者は「明治時代に入つて庚申信仰が衰えた」と云う前説を誤りとして訂正し、明治前半期に始めたと伝えられる五つの庚申講の所在地を列挙したあと「さらに秋田の10(男鹿市北浦町)で私がたずねた講は現北浦町内では最古の伝統をもつ庚申講でありながらその歴史はわずか七〇年にすぎなかつたから男鹿半島地区の庚申信仰は一般にさほど古い歴史をもつているとは考えられない。従つて明治時代には庚申塔の造立数こそ少なくなつていくけれどもそのことだけから直ちに庚申信仰が衰えた」と速断することの誤りである由が推定される」(四)と述べているが、「江戸時代に実に多く造立された庚申塔が明治になると俄然造立数が少なくなる」(三)事実の理由を何等明らかにすることなく安易にかゝる訂正をしていることは納得出来ない。いわんや北浦町の日枝神社には現に天保十三年・弘化四年・慶応年間の庚申塔が存在しており、同じく男鹿市船越町には年代不明ながら最も古いと見做される磨滅・破損の二塔のほか文化八年・安政四年の塔が現存しているからである。講創始の時期の伝承は信頼出来ぬ場合が少なくなく、時には中絶後における復活の時期と混同する場合もあり注意を要する。

その第二は著者の蒐集せる尠大な資料をもつてするならばその帰趨は明らかであると憶われる場合にも、余りにも日本民俗学者の批判にござわり、却つて自らの視野と論域を狭めている点が眼につく。例えば著者は庚申の共同神の性格を全面的に否定して柳田氏の所説に反論するが（三七三—四）、著者の蒐集せる「庚申の利益と属性」（三四一）の中には抱瘡神・惡魔退治神・鬼門の守り神・町内の守り神・外魔を防ぐ神など、いわば共同体の安全と利益に密接に繋りをもつものが半数近くあるだけでなく、庚申塔の建立場処が「村の入口」及び「村のはずれ」に最も多い（七四七）とするならば、その本質的性格は兎も角、庚申祭祀に疫病災害に対する共同防禦的な意識の働いていることは否定出来ないであろう。また著者はこれと並行して庚申塔婆に少なからず見出される「村内安全」の祈願についても「その文句は塔婆の銘文執筆者の勝手な作為もしくは常套語にすぎないからそれを当時の庚申信仰の実態の反映とみることはできない」（三七四）と断じているのも聊か勇み足の嫌がある。例えば津輕藩の神社社寺由緒調書上帳に記載される一般社堂の建立祈願が殆ど規を一にして「村中安全五穀成就」の常套語で占められているのに対し、庚申堂

のそれは「村中病種退散」（延宝八年建立）「村中安全疾病退散」（元文三年）「市中諸惡退散当湊廻船海上安全」（寛文十一年）など具体的な祈願が過半数を占めている事実は庚申の共同神の性格を無礙に否定することの必ずしも正しくないことを示すものであろう。とは云え筆者は著者の主張する三戸説と庚申信仰の密接な繋りに疑問を挟む意図は毛頭ない。たゞこの場合両者の最も濃厚な繋りを示すものが、恰も人間の司命奪算を掌る三戸の機能と害惡に対応するかの如きこれら庚申堂の建立祈願の中に見出されることに注意を喚起しておきたい。殊に庚申信仰の本質が「庚申の日に清浄に徹夜して長生を求める」（七二七）ことであり、庚申の利益の大部分が長生・病氣・災害に関するものである（三四一）ならば尙更のこと、この点に拠つて積極的に三戸説と庚申信仰との關係を強調すべきではなかつたか。また現在の庚申講におつて婦人の出席を許さず出産・月経を忌み嫌う風習の残つてることについて「縁起にも月水出産を嫌わずとまで記されているのであるから『けがれ』を理由とするのは古来の習俗ではない」（一一九）といふ、室町末以後「三戸が早死をのぞむというのが、ついで死を好むといわれはじめ、死を好むなら反対に生を嫌う

に相違ないとの推理が働き生を嫌うことになり、ついで出産を嫌うとされ、さらに月経までもとしいに拡張解釈が行われた結果現在の如くなつたのであらう」(六九二)と聊かもつてまわつた解釈をつけているが、斉戒録の説雑齋法には庚申齋その他「行齋之人、特忌斬衰孝子、新産婦人、月信未断、及痰瘡疹癰疾等、並不得昇齋堂」と説かれ、明らかに「蓋此等人穢触、真靈賢聖不降、乃修齋無功也」と註されていることによれば、それが道教の「けがれ」の觀念に基くと考えるのが穩当であらう。この点も道教の庚申齋と現行庚申待の習俗との間の密接な繋りを立証する有力な資料となるべきものを著者が却つて強引に否定し去つてゐるのは、恐らく神道の「けがれ」との関連を念頭においてのことであらうが、第一章に説雑齋法の条を引用しながらこゝで僅かに至言總の記事に言及するに止まつてゐる(六九八)ことゝ共に納得し難いものがある。

既に紙幅の余裕がないので部分的な質疑を省き、最後に誤写・誤脱の類の目立つものを指摘しておくならば、まづ七〇〇頁に引く太上科律は五九頁の太上律科の誤りであらうが、索引までが兩者を別本として取扱つてゐるのは粗漏である。また六六一頁の「庚申の塔」は塚の誤りであらう

が、この点は「木製の卒塔婆や供養木を庚申塚とよぶ地方があるので混乱をさけるべく本書では石塔を庚申塔とよぶ」(八)と態々断つてゐるだけに慎重を期すべきであつたらう。このほか止むをえないことながら協力者の筆写に基いて引かれる資料には問題が多い。例えば六〇八頁の「庚申塚」仏事建所の儀の□は念であり、事は車の誤脱である。また附録の部に掲載される資料にまゝ誤読があり、且つ筆写の態度の不統一が氣になる。写本の仮名を漢字に直すのは読み易くする点から一応よいとしても、この際に誤つた当て字がなされる一方、逆に漢字を仮名に直すものもある。例を「庚申之本地」にとれば、仏か(果)を仏過と誤り(九九六)。供し奉るをぐうし奉ると写し(九九六)。ちやうぶくけがれに調伏を当ててゐるが(九九七)、敢えて当てるならば重服もしくは重腹が妥当であらうし、当然統けて穢の写を当てるべきであらう。斯くの如き諸点は資料篇に関するものであるだけに殊更惜むべきものがある。再版の際の訂正を願つておく。

叙上本書の荒筋を紹介するとともに通読して懐いた若干の所感を陳ねてきた。聊か著者の恩顧に甘えて未熟な卓見を弄し過ぎたが、万一卓見に一・二の理があつたにして

も、もとより本書のもつ数々の長所を掩うものではない。千有余年に亘つても日中両国の文化形成のうえに少なからぬ影響を及ぼしてきた申庚信仰の全貌を総合的に解明した著者の偉大な業績は、巻末に附した周到な年譜の作製、尤大な関係文献資料蒐集の功績と共に将来に永くその光を放ち続けるであろう。伺うところによれば著者は更に詳細な庚申年譜の出版を企図されていると聞く。著者の健康の恢復を祝し、筆硯の愈々盛んならんことを祈つて擲筆する。

(昭和卅六年、日本学術振興会発行)